巻頭言

臨床心理士の活動を考える

――リエゾン（連携）の大切さ――

森　下　高　治

カウンセラーが活躍する場として学校、病院（クリニックを含む）、子ども家庭センター、健康保険組合、施設、産業、司法、警察、自衛隊などの場がある。

昨今の病んでいる社会の相談の中で、危機的状況にある来談者を迎えることがあるが、実際カウンセラーが出会う危機的状態は、治療や面接過程で起こることが考えられる。

特に、クライエント（以下、Cl.）の危機状況における臨床心理士の役割、活動を医療、教育、福祉の領域を中心に考えてみたい。ここでは、大阪府臨床心理士会のワークショップ（2007年12月、大阪国際会議場）でリエゾンをめぐるシンポジウムを持ったが、その時に司会を森下が仰せつかったので、この機会にそこから学ぶことをまとめてみる。

リエゾン（liaison　連携）の語源は、もともとフランス語で単語が結びつく連音に由来している。心理臨床で使われているリエゾンは他領域、他部門、他業種の関係者と協力、共同してCl.への援助をなす場合を連携と称する。精神医療領域の本来の意味は、精神科医と他科の医療スタッフが継続的な連携システムを作り、他科のCl.の精神面の診療を行うことである（小此木ら，1992）。

まず、福祉領域では、虐待を受けた子どもが親を訴えるケースがある。親権剥奪の意見書が子ども家庭センターから家裁に提出、司法との連携、施設との連携、学校との連携が生じる。子どもを救うにはどうすればよいかを第一に考え、子どもを被害から守り、裁判を通して得るものもあれば、友人や家族の喪失、経済的ダメージ、繰り返される証言や量刑などを通して二重に傷つくことになる。さらに「自分が家族を壊した」という罪悪感をもち続ける。親権剥奪に至るケースは、実際は少ないが後見人選任の問題が次に訪れる。子どもが自分の気持ちを話せ、それが聞けること、基本的な法律を知る（知ろうとする）こと、子どもが裁判をおこすと決心した時、子どもの心理状況や望んでいることを把握し決断に責任をもつこと、カウンセラーは現実感覚を大切にサポーティブな姿勢や視点をもつ、そのようななかで福祉領域では、連携は極めて重要な課題である。

次に、医療の領域では、「コンサルテーション・リエゾン精神医学」という観点から、Cl.の面接やチーム会議を通して本人の治療促進にいかに関与するかということが重要となる。クライエントの治療環境を整えるために、カウンセラーがCl.に関する見立てを医師や看護師らに伝えることで、医療チームの潤滑油的役割を果たすのも大きな役割である。病院という非日常的空間で臓器移植や病気の再発と闘っているCl.に加え、疲弊し余裕を失いつつあるチームの本来の力をいかに引き出すか。

実際の面接においては、本人を守るために初回に面接構造を話し、Cl.の精神的混乱を静める。目に見える事象への手当てだけではなく、本人自身の社会心理的側面に関心をもち、生育歴から発達課題を見極めた上で心の領域に入り、それを査定する。Cl.に関する見立てをチームに伝えることで医師や看護師らにずっしり乗っかった重荷がとれ、チームとCl.との関係が変わっていくことがある。以上から、医療の連携は大切である。

また、教育の世界では、スクールカウンセラー（以下、SCとする）は「いつでも危機的状況がおこりうる」学校におけるケースをもつ。受験に対して悲観的になった子どものケースで、自傷行為によって長期間の治療を余儀なくされた生徒やその保護者を、進路問題を視野に入れつついかに支えるか。また、自傷行為の因果関係をめぐり不協和音が生じている保護者と学校をいかにつなぐか。このような状況では親は子どもの回復に対する不安のみならず、原因となった事象に対する不安や再発の不安をも背負うことになる。SCとして「保護者や子どもが話しやすい環境をつくり、話を聞くこと」が親の安心に対して大きな意味をもつ。一方で正確な情報と信頼性のある答を提供することも求められる。また、子どもの危機的状況から家族の潜在的課題が浮き上がる場合もある。病院との連携においては出来ればケース会議に出席し、医療チームが思い描く思春期の発達レベルとまだまだその発達途上にある子ども像とのギャップを明確化し、治療を促進する役割を担う。「危機的状況から子どもがいかに成長していくか」というテーマを深く心に留め、家族や学校、医療と連携することが求められる。

最後に、私が関わる産業領域で危機的状況ではない場合でも円滑なクライエントの適応を促進するために連携の問題は重要である。ケースによっては、病院や個人クリニックの精神科医との連携、またCl.がおかれている立場によって異なるが、産業医を中心とする産業保健スタッフ、職場の直ぐ上の上司、さらに会社、企業の人事担当者、これ以外にCl.を取り巻く家族、労働組合関係者も時としてカウンセリングではなく、Cl.とどう接するかをも含めたコンサルテーション（指導）からリエゾン（連携）の問題は、いつでも起こり得ることである。以上から、ここで上げたリエゾンの問題は、心理臨床活動を進めるにあたり大切な問題で事例検討会などを通して研鑽と経験を積むことが重要で、リエゾンによりカウンセラーはCl.の抱える問題に解決の糸口を提供できるものと思う。